

予言される未来社会

Mary Griffith と Nathaniel Hawthorne にみる女たちのユートピア

城戸光世

序——プロトSFとしてのユートピア文学

SF 研究の古典 *Pilgrims through Space and Time* の著者 J.O. Bailey が、SF の起源をユートピアや架空の航海に求め、SF を科学的発見が社会にもたらす影響を思考する文学と位置づけたように、プロト SF としてのユートピアは、未来社会の制度的設計図を提示するものと長く理解されてきた。しかし近年のユートピアへの理論的関心は、「フーリエの時代」とも言われるアメリカの 19 世紀を、単なるユートピア設計図の時代ではなく、多様な未来の可能性が交錯する場として再評価する機会を提示している。

Mary Griffith の *Three Hundred Years Hence* (1836) における未来予想図

「アメリカ人女性のユートピアの伝統を始めたパイオニア」(Suksang 22) とも言われる Mary Griffith は、裕福な商人と結婚したが 40 代で未亡人となり、その遺産の一部で購入した地所を使って果樹や植物や昆虫などの栽培法や害虫除去などの実験に従事し、文芸作品とともにその研究成果を雑誌や新聞などで発表した。彼女のこのユートピア短編には、土地景観や植生などへの記述以外にも、夫と死別した妻に対する遺産の扱いや、女性の教育や経済的自立の重要性など、園芸や文筆活動で家族を支えたグリフィス自身の体験が色濃く反映されている。

物語は、主人公 Edgar Hastings が長い眠りから目覚め、300 年後のアメリカ社会を観察するという設定を持つ。ユートピアの多くが「遠い島」や「未知の土地」にあるという設定が多い中、本作品では、科学技術の進歩によってよりよい社会が未来に訪れるという、いわば「未来に向かう強力な願望」が反映された時間的ユートピアである(川端 187)。この未来社会では科学的合理性によって環境が清潔で効率的に整えられている。主人公が未来で訪れる市場も、腐敗した野菜や悪臭もなく絵画のように清潔で整っており、農業や畜産業など食料供給チェーン全体がクリーン化された管理の成果として読める。また主人公を 300 年後に「移植」して観察させるという物語構造そのものが、植物を別の環境に移して生育を観察する園芸学的方法のメタファーとして機能している。

Jane Donawerth は、本作における Lady Montagu の天然痘予防接種の導入や、19 世紀前半当時事故の多かった蒸気機関に代わる代替エネルギーを未来の女性が発見するという本作の設定を取り上げ、グリフィスは現実の過去と想像上の未来を結びつけながら「女性の科学」の伝統の可能性を創り出していると評価する(6)。本作は女性もまた科学の進歩へ貢献してきた歴史を読者に想起させ、未来社会における大きな科学的発見の功績を女性に帰す。また未来社会では戦争や決闘などによる暴力と野蛮さがなくなっているが、それは女性たちの道徳的影響力の大きさのためとされ、その影響力は妻に夫と同じだけの家庭内権威を授けたことから生じているとされる。

このようなグリフィスの未来社会の女性像を理解するためには、当時のユートピア建設運動の歴史的文脈を踏まえる必要がある。本作執筆時に運営されていたシェイカー教徒たちの宗教的共同体や、Robert Owen の New Harmony に感化された社会主義共同体は、女性の経済的自立や男女同権など、本作で描かれた未来社会での女性像と共鳴する点が多くあった。たとえばオーウェンは、女性が家庭内労働と育児に縛り付けられることがその知的発展を妨げていると考え、彼の建設した New Harmony では、共同炊事場や共同保育所などが設けられ、個別の家庭や女性に負担が集中しない仕組みが目指されていた。また当時の法律や慣習において女性が夫の所有物のように扱われることを批判し、男女の完全平等な労働という理想も掲げたが、実際には調理や縫製など慣習的に「女性の仕事」とされた家事に女性が割り当てられることが多かったとも指摘されている。当時実現の困難だった理想社会を、科学技術の発達した 300 年後の未来に投影して見せたのがグリフィスの本作だったと言える。

19 世紀アメリカにおけるユートピア建設運動と Hawthorne の女性たち

一方 Nathaniel Hawthorne は、このような共同体建設の黄金時代に実際にユートピア的共同体に参加した経験を持ち、実体験に基づくロマンスを描いた作家である。阿野文朗氏の言葉を借りるなら、ホーソーンは共同体からの孤立と帰属や復帰という問題に「19 世紀アメリカの作家中、最も切実に、そして最も現代的にかかわった作家」であった(94)。ホーソーンとユートピアというテーマを再検討する動きも近年目立つが、たとえば 2025 年刊行の *Nathaniel Hawthorne Review* の 51 号はまさに、Utopian Hawthorne と題された特集号であった。その編者である Monika Elbert は巻頭言で、ホーソーンの長編はどの作品にも“original utopian hope”があると断言する(vi)。またホーソーン作品とフーリエ主義の関係を詳細に分析した Andrew Loman は、ホーソーンの描いた共同体の理想と限界がいかに「許されざる罪」といったテーマと密接に結びついているかを指摘し、ホーソーン作品を単なる「抽象的な罪と救済」の物語としてではなく、同時代の社会主義的ユートピア論への応答として読まれるべきだと主

張した。未来への希望に満ちた人々とのつかの間の共同体生活は、ホーソーンにとっても、「確かに私の人生の最もロマンチックな出来事」という感傷を抱かせ（*Blithedale Romance* 2）、当時を懐かしむノスタルジアを生み出したのだろう。他方語り手カヴァデール自身の、知的活動は激しい肉体労働とは相容れないとの述懐にも作者の実感が込められている。拙論でもかつて論じたように、同時代のユートピア実験共同体の多くでは、労働に関する理想と現実の乖離は大きく、女性たちには共同体の日常生活を支える家事労働の従事が期待されていた。ブルック・ファームをモデルにした *The Blithedale Romance* でも、ブライズデールでの女性たちの労働をゼノビアがカヴァデールに説明し、カヴァデールがそのような家事労働をこのユートピア共同体から排除できないことを残念がる場面がある（16）。しかしゼノビアはこの男女の性別役割の逆転を暗示することで、女性のみが家事労働に従事するという慣習への異議申し立ても見せている。実際共同体参加以前の裕福な生活が想定されるゼノビアは、家事労働やケア労働に不慣れであったことが、病気で寝込んだカヴァデールの看病やおかゆ作りがうまくなかったというカヴァデールの説明にも見て取れる（48）。また彼女の異母妹でありお針子だったプリシラもその点では同様で、共同体での労働力としての貢献は期待できなかったと描写される（74）。その意味では姉妹は二人とも、既存社会から離れた共同体であっても、当然のように家庭内労働が女性に期待されるという現実に抵抗する存在であり、いわばユートピアに根強く残る家父長的ジェンダー役割へのアンチテーゼ的な役割を担っている。ホーソーンは心情的には Ernest Bloch のいう希望の心性としてのユートピアに一定の共感を示しつつも、その実現性には懐疑的にならざるをえないという非常に両義的な態度を示していたと言えるだろう。

ホーソーン作品におけるユートピアは、人や社会が同じ物理的条件や精神的構造を抱えている限り、崩壊へと向かわざるを得ないことが暗示される。しかし彼のロマンスでは、現在ではなくても未来には、異なる男女の関係性に基づくオルタナティブな社会の到来が予言されている。*The Scarlet Letter* ではヘスターが、男女相互の幸福に基盤を置いた未来に女性が主導する社会が生まれるのではないかという予言を行い（263）、一方『ブライズデール・ロマンス』でも、ゼノビアやカヴァデールがそのようなオルタナティブな社会を夢想する（121）。女性は現実の〈いまここ〉にあるユートピア的共同体を主導し構築する存在としてではなくても、未来社会における道徳的指標としての指導的役割が期待されているのである。重要なのは女性の影響力が家庭内のみではなく、共同体や社会全体に広がることが予言されている点である。そのようなヘスターやカヴァデールの予言や希望、いわば「ユートピア的衝動」は、未来のユートピア社会での女性についてのグリフィスの想像力と近似性を持つ。

結び

19 世紀にオーウェンやフーリエの社会主義的共同体に参加した女性たちは、一時的であれ、男性のみ政治的経済的権威を担っている外の社会では不可能な自由や権利を享受していた。そのような共同体建設熱の時代にグリフィスは、科学技術の進歩によって女性が大きな権利や自由を持ち、家庭でも社会でもより高い地位を確立している未来のアメリカ社会を想像した。一方ホーソーンの描くユートピアは希望も懐疑もどちらも備えた両義的空間であり、女性が主導する社会は、未来という時間的距離の遠い先に設定され、人間性が変わらない限り理想的な社会が急に誕生することはないという考えが窺える。そのように人間という種そのものが変化するユートピアは、19 世紀末から 20 世紀にかけて Charlotte Perkins Gilman 等女性作家たちが想像するようになる。グリフィスの未来社会像もホーソーンのロマンスの女性たちの未来への予言も、近年のユートピア論が前提としている、異なる現実と空想とを架橋する想像力、ブロッホのいう Not-Yet の希望を秘めたものだと言えるのではないだろうか。

Works Cited

- Bailey, J. O. *Pilgrims Through Space and Time: Trends and Patterns in Scientific and Utopian Fiction*. Greenwood, 1972 [1947].
- Donawerth, Jane. *Frankenstein's Daughters: Women Writing Science Fiction*. Syracuse UP, 1997.
- Elbert, Monika. "From the Editor's Gable." Utopian Hawthorne, Special Issue, *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 51, 1. 2025, pp. v-ix.
- Griffith, Mary. *Three Hundred Years Hence*. Carey, Lea & Blanchard, 1836.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Works of Nathaniel Hawthorne*, vol. 1, *The Scarlet Letter*. Ohio State UP, 1962.
- . *The Centenary Works of Nathaniel Hawthorne*, vol. 3, *The Blithedale Romance and Fanshawe*. Ohio State UP, 1964.
- Loman, Andrew. "Somewhat on the Community-System": Fourierism in the Works of Nathaniel Hawthorne. Routledge, 2005.
- Suksang, Duangrudi. "Mary Griffith's Pioneering Vision: *Three Hundred Years Hence*." *Utopian Studies*, vol. 11, no. 1, 2000, pp. 22-37.
- 阿野文朗『ナサニエル・ホーソーンを読む——歴史のモザイクに潜む「詩」と「真実」』研究社、2008 年。
- 川端香男里『ユートピアの幻想』講談社、1993 年。